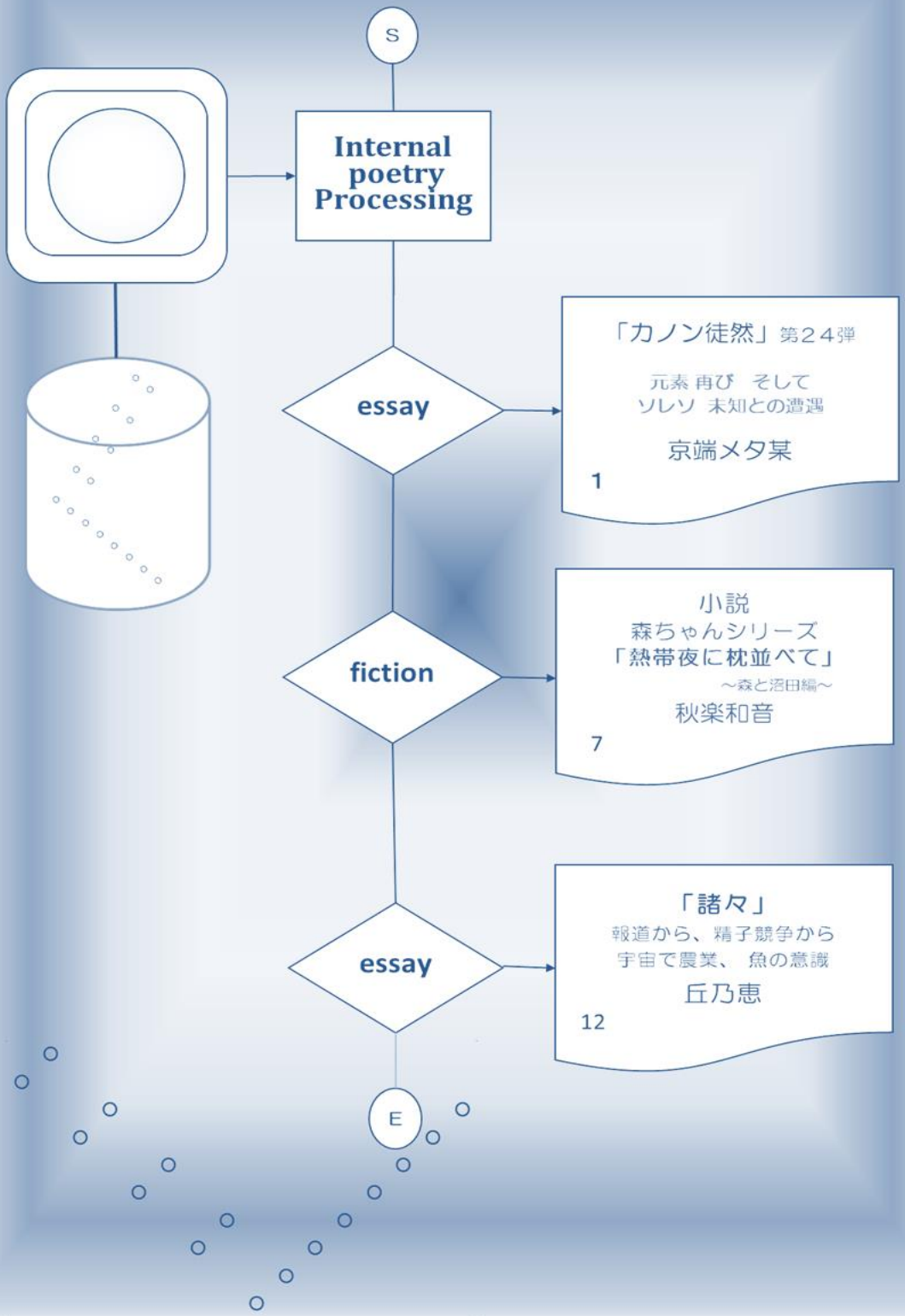
未来世界仕様書

Vol.24 V1.0 Rev1.0

マイナーな考えの行方は

微塵の運動のひとつとして
その運動は詩となるでしょうか


S
Internal poetry Processing
essay
「カノン徒然」第２４弾
元素 再び　そして
ソレソ　未知との遭遇
京端メタ某
1
fiction
小説
森ちゃんシリーズ
「熱帯夜に枕並べて」
～森と沼田編～
秋楽和音
7
essay
「諸々」
報道から、精子競争から
宇宙で農業、 魚の意識
丘乃恵
12
E

～パッヘルベルのカノン礼賛エッセイ～

カノン徒然　第２４弾

元素　再び　そして　ソレソ　未知との遭遇

京端メタ某

前回、楽器の練習はお休みと言っておきながら、ピアノは弾いてしまっています。だってそこに楽譜があるんだもん。

和音の響に没入。自分で音を出す悦。振動に浸れる～おいしい～って感じ。

「音楽は聴覚のチーズケーキ」（ピンカーだっけ？）と言われて怒った音楽家がいるとかいないとか。いいじゃないですか。チーズケーキ。（京端はクリームパンでもOK）まさしくそうでしょうよ。舌の上でとろける脂肪と甘味。和音にとろけていく京端。

ただ心身の調整不足か京端のテンポは不整脈のごとくに乱れておる故に、なかなか滑らかに弾けないのがもどかしい～。録音してみると歴然。なんとかなんらんのかね。イヤホンからメトロノームを流して誤魔化す、しかあるまい。と思っているこの頃です。

チーズケーキの意味は、「進化に関係ない」です。でも京端解釈によれば、進化のご褒美であります。

元素　再び

第６弾の話題「そんげ歌うでんのか、のるべるへっぱ」が、YouTube にアップされているのを知りましたので、第２４弾の関連動画に入れました。１０年近くかかってようやくということになります。歌詞が聞き取りづらいですが、是非とも加えたい一曲でしたのでヤッター感がいっぱいです。

この曲名を逆さから読んでみてください。

「パッヘルベルのカノンで歌う元素」となります。

実は科学とカノンのコラボ曲。ソプラノが元素を列挙しているのです。２０１２年夏に開催された国立科学博物館の特別展「元素のふしぎ展」の記念品です。売店で売ってました。媒体は、缶バッジ「元素ｄｅ ＰＬＡＹ ＢＵＴＴＯＮ）。京端も手に入れるべく足を運んだのが懐かしい。でも、もう動きません、残念。

さて、周期表というもの、京端の学生時代と変わっていなければ、教科書の表紙裏に載っており、科学教室にも貼ってあるものと存じています。だから皆さまもきっと見たことありますよね。

構成粒子の数によって性質に周期性のある不思議。只今チェックしてみたところ、元素番号１水素から１１８までで７周になっておりました。螺旋。

パッヘルベルのカノンも一種螺旋構造。ドソラミファドファソ（ハ長調では）の通奏低音の上で、上声がゆっくりで単純から複雑な掛け合いに変化するため螺旋的上昇感のある曲です。

第６弾は、この世の実在！を組み立てている元素と、パッヘルベルのカノンに共通点を見出し、パッヘルベルのカノンが我とわが身、いや、人類に引き起こす感動の源泉・原理を妄想し「興奮！」した回でした。

ソレソ（Solresol）

突然ですが、ソレソは、ドレミファソラシの７音からできた人工言語です。例えば「愛する」はミレソ。「秋」はドドシ。文法も簡単（とか）。伝達方法はいろいろあります。ドドシと喋ってもいいし、ドドシと演奏してもいい。手話でもいけます。変わったところでは、虹の７色でも表せます。なんせ７つしか音がないのです。

京端は、１０、１１弾で、音階と色を対応づけた色カノンを

作ったので、「いや～音と色を対応付けた人がいたんだぁ」と俄然興味を持ちました。

この人工言語を作ったのは、フランソワ・シュドルさん。１８１７年頃の考案です。１９世紀の西洋人は色々着想しますね！当時はそれなりに知られた言語だったそうです。

パッヘルベル（１６５３年生）は、ずっと前の人なので、まったく意味ないとは思いつつ、興味本位から解読を試みようとしています。今のところは、お知らせだけです。

簡単文法というものの、それなりにややこしい。それに、単語は４音以下なんですよ。通奏低音の７音をどう分ければいいのか分からない。

ということで、「音楽言語」という文法書は購入しましたので、おいおいにできたらと思います。偶然にでも何か言っていたら面白いなと思っています。しゃべっているように聞こえる上声部も解読してみたいけど、これはかなりの難易度。

なぜ、ソレソを知ったかと言えば、たまたま「未知との遭遇」（スピルバーグ、１９７７年）を目にしたからです。

有名な映画なのでご存じの方は多いでしょう。当時は「未知との遭遇」か「スターウォーズ（ジョージ・ルーカス　１９７７年）かと、映画ファンを二分しました。

ファーストコンタクトに使われるのが「レミドドソ」の５音階。夜の砂漠に円盤が現れ、人類のシンセが響きます。その背景で、７色が大きなパネルに点滅してるんですよぉ。

この５音階は、通奏低音という位置づけではありませんが、オスティナートよろしく、繰り返し鳴るのです。けっこう感動的です。

この音階になった理由はよくわかりません。劇中ではインドの修行者が唱えるマントラから採取されます。

また、音階と虹の７色音の対比もきっちり一致しているようには見えませんでしたが、音と色という組み合わせがあるだけでも注目です。

当時は、部屋にポスターを貼っていたくらいなのにすっかり忘れていました。

すぐに調査。そして、ソレソにたどりついたというわけです。

ユーチューブには、異星人と出会う場面の映像があったので、再生リストに入れました。５音と色を確認できます。

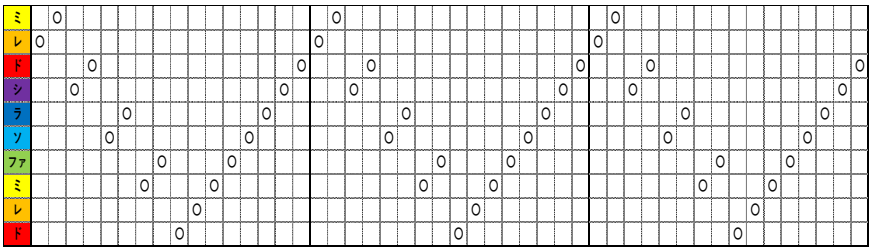


図1　基盤となる進行

ところで、ドソラミファドファソとレミドドソって何か感じが、少し似てはいませんか？

ちょっとさぐってみましょう。

それぞれの音の進行は次の通り。

パッヘルベルのカノンの通奏低音

・ドソラミファ【ド】ファソ

未知との遭遇

・レミド【ド】ソ

※【ド】は底音。下降から上昇に変わる、折り返し地点の音

以前も、カノンの通奏低音については、下り方や対称性を考えました。この度、未知との遭遇と合わせてみて、ひらめきました。

この進行です。図１

・レミシドソラミファ【ド】レミファソラシド

シンプル！両方の乗る共通地盤の進行です。

解説いたしましょう。

図1をご覧ください。縦に音階、横は時間です。3回繰り返してます。

前半の、レミシドソラミファ【ド】レは、レミ、シド、ソラ、ミファ、【ド】レと分かれて見えます。音程が2度上がって4度下がるという繰り返し、上がってはグッ下り、全体としてジグザグと下っていきます。(実は、この先に、ラシ、ファソも続けられますが、ここでは出番がないので割愛します)

この進行は、チェンバロの練習でもしばしば出てきました。17世紀のコンペンディウムでも見かけるので、昔、たぶんパッヘルベル以前からあった進行なのでしょう。

後半は【ド】レミファソラシドの基本の上り音階です。先頭の【ド】レは、前半の最後尾の【ド】レと重なっています。シドで切って、ワンサイクルとしましたが、続きにはレミがあり、それは、次サイクルの始まりです。

詳しくみたいと思います。

前半の「レミシドソラミファ【ド】レ」を2音づつ、区切ってみましょう。

「レミ」「シド」「ソラ」「ミファ」「【ド】レ」

これを下から上に並べると

「【ド】レ」「ミファ」「ソラ」「シド」「レミ」

つまり、【ド】レミファソラシドレミという後半の音階プラス次サイクルの先頭になるのです。

後半側を基準にすると、こんな説明になります。

後半部の【ド】レミファソラシドと次サイクル先頭のレミを2音ずつ切ると、

「【ド】レ」「ミファ」「ソラ」「シド」「レミ」。」

これを下から順に並べると、

「レミ」「シド」「ソラ」「ミファ」「【ド】レ」

レミシドソラミファ【ド】レという前半部と同じになります。

幾何学的ですね。

複数の部分回転と鏡像で重ねることができます。

ここまで分かると、これって、ドシラソファミレ【ド】レミファソラシドシラソファミレ【ド】という単純な上り下りの下り側を、ちょっとおしゃれにしただけのものじゃん?とも見えてきます。

ここに、パッヘルベルのカノン、未知との遭遇をプロットしてみましょう。図2と図3。

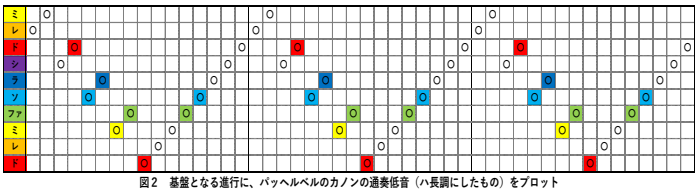


図2　基盤となる進行に、パッヘルベルのカノンの通奏低音（ハ長調にしたもの）をプロット

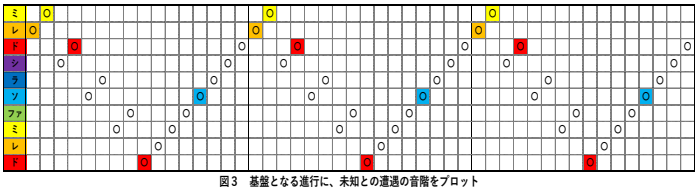


図3　基盤となる進行に、未知との遭遇の音階をプロット

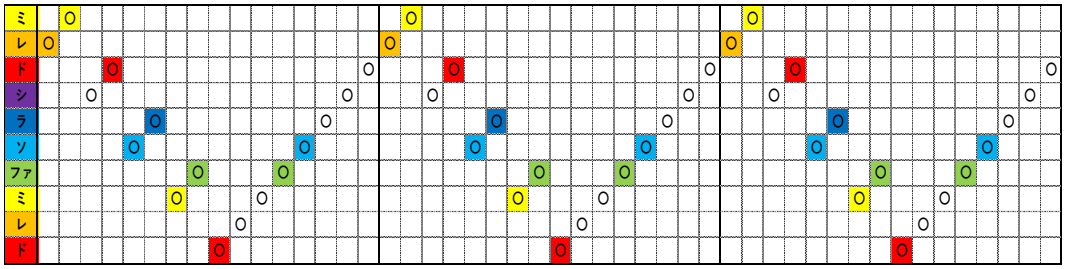


図４　図２と図３を重ね合わせた図

使わない音がありますが、注目するのは、一回の下り上りのＶ字の中に、音階は順を守って出てきて、逆行しないというところ。

京端の耳に、両者は、何か似て聞こえたのですが、それは暗に存在する共通地盤を感じたからでしょうか。ドドソという目立つ音だけでなく、レミも、パッヘルベルのカノンの通奏低音との共通点があったのでした。

こじつけ！という声も聞こえてきそうですが、ロールシャッハのインクしみ？とは思いつつも、カノン礼賛の為に、あれこれ言いたい京端なのですよ。楽しい！

さて、この地盤進行の上に、両者を重ねてプロットしてみましょう。図４です。

どんな感じ聞こえるでしょうか。

演奏する場合、もし、ひと枠を１拍ととらえると、オリジナル曲とは少々リズムが変わります。

レミ・ドソラミファ【ド】・ファソ・・・

見た目もキレイなジグザグパターンです。

更に、これを積み重ねてみます。図５巻末に拡大版を載せましたのでそちらもご覧ください。この図では、縦は１６オクターブ、横は８４枠あります。時間は左から右に流れています。

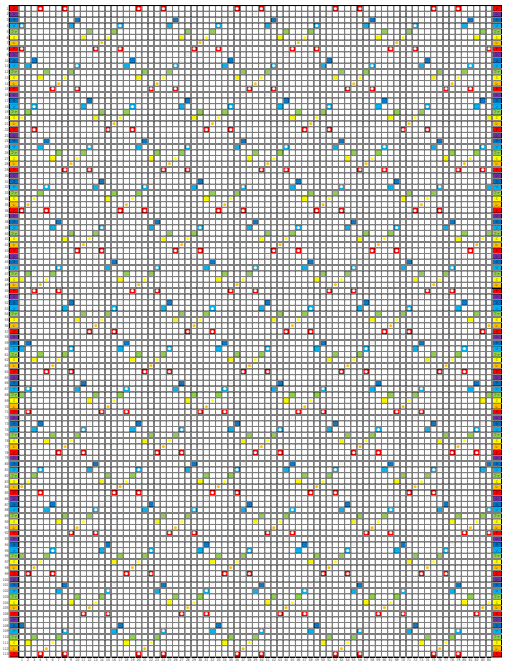


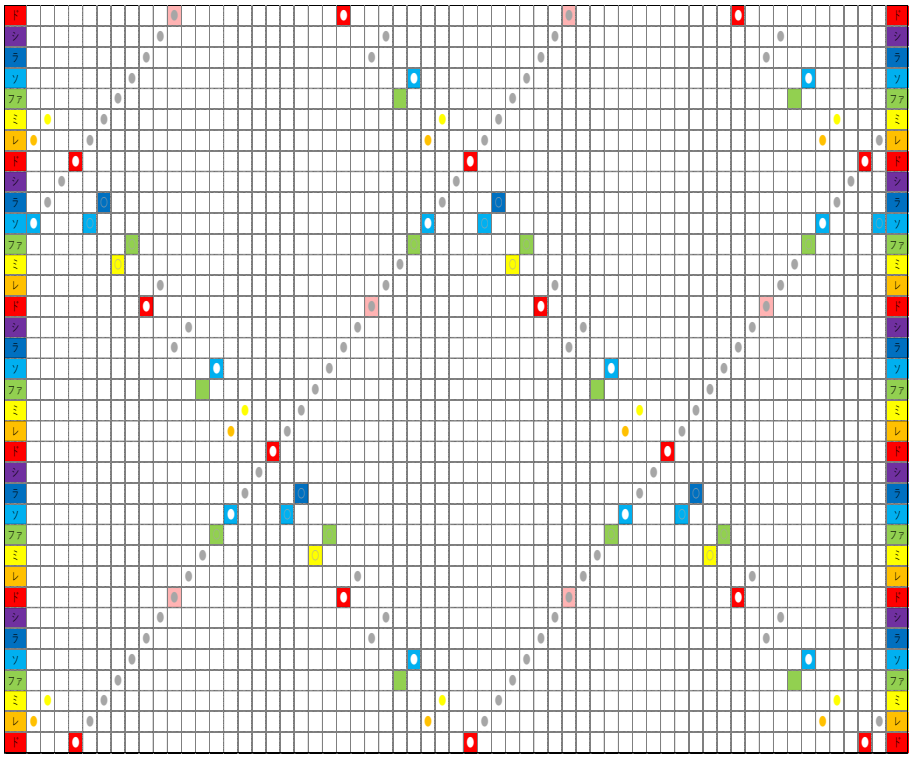
図５　パッヘルベルのカノンの通奏低音と未知との遭遇

素朴でちょっとカワイイ模様になりました。

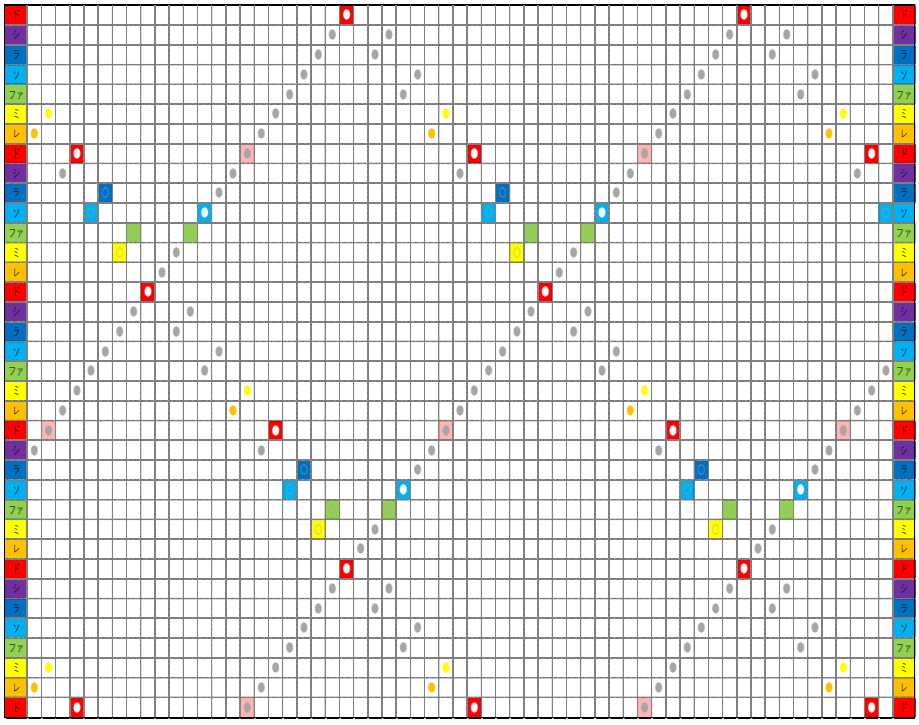
レミ・ドソラミファ【ド】レミファソ・・ド

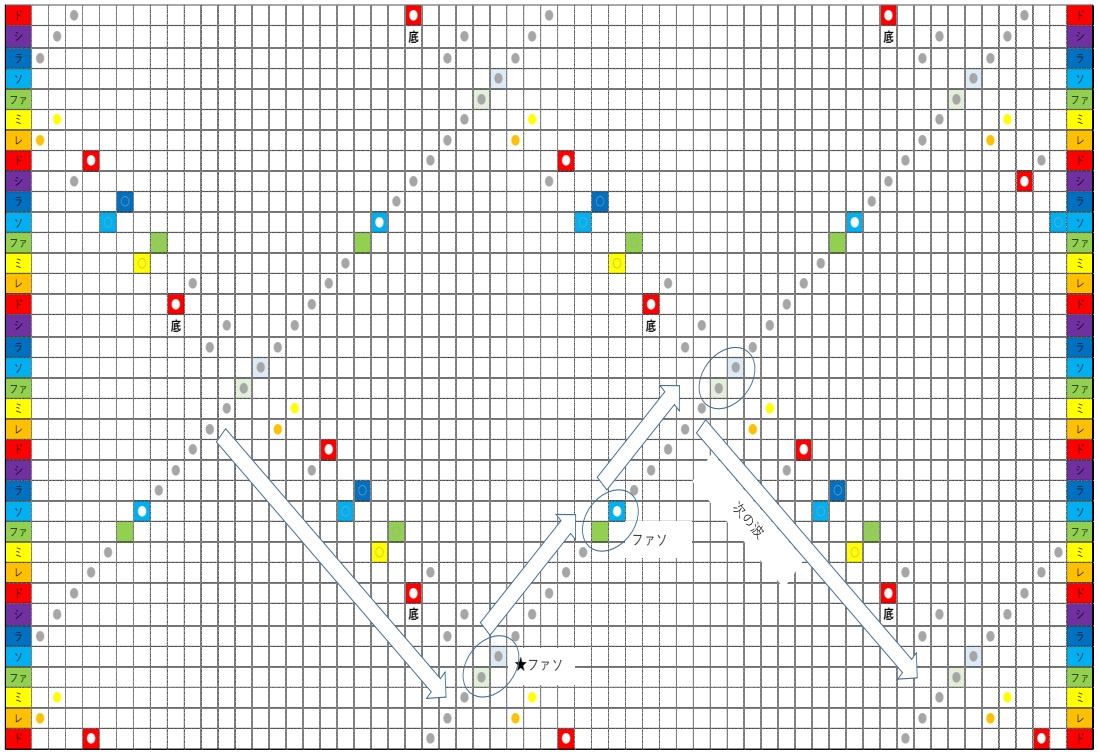
ワンサイクルがいちオクターブを超える為、上のオクターブへの乗り入れがあり、レミ、ドが同じ音程上に増えました。

今回は成果を感じるな～と自画自賛。色や模様もあるし。



更に微妙な所を追求したく、対称性を追求したパターンを作ってみました。ドが基準の交差です。上昇の起点となるドの位置により２パターン。２オクターブの大波になってしまいました。使っていない音がありすぎで、共通基盤というには言えないかな。ここでは未知と遭遇は〇印にしてみました。





もうひとつ、
ファソで上昇するパターンを作ってみました。
ちょっと曰くありげと興奮しております！
要はファソ。基盤進行の底【ド】を含むドレの下は、ラシ、その下は、ファソです。そう、ファソなのですよ。何がいいたいかって？　カノンの通奏低音最後の２音はファソ！！
そのファソ（★）で上向きに折れましょう。
図５に印と矢印をいれました。
ラシドレミと上昇し、一オクターブ上のファソ。これが通奏低音の高さのファソです。
そのままラシドレミと上昇し、一オクターブ上のファソ。ここで下に折れ次の波に入るのです！
★のファソでエスカレータに乗り、右上にスライド上昇している感があります。ファソは、折り返しの目印にもなっています。とっても意味ありげです。
そしてもうひとつの発見。
右下に向かう２上り４下りのジグザグ進行を下に向かい、永遠に進み続けられるのです。未知との遭遇レミドドソも、パッヘルベルのカノンのドソラミファドファソも。
同じ高さに戻るルートとして、スライド上昇があるのかあ。なんかスゴイ発見をした気分！！。

以前の成果、音を色に変換したパッヘルベルのカノン（第１１弾で作ったもの）はホームページに載せています。動画と図があるから見てみてね。
またまた、閃いたのですが、これら２次元図、３次元にすると楽しいかも。音楽全体が一目で見える立体。可能？！！。

了

最後までお付き合い頂きありがとうございました。

森ちゃんシリーズ

熱帯夜に枕並べて　～森と沼田編～

秋楽和音

佐々木シンが二十二歳を迎えた夏の宵。

丸い脚が４本ついたダイニングテーブルで、お茶のコップと缶ビールを合わせてふたりは乾杯した。

２ＤＫのアパート。キッチンテーブルは沼田家のお古。往年の変色や傷を隠すために、チェック柄のビニールクロスをかけていたが、それもタベモノのシミで汚れている。そして、沼田セイジは数か月後に十九歳となるころだ。

祝いのクライマックスは、ろうそくを３本立てたじゃがバター。定番ソングを歌い、主役が吹き消すこととなった。太いろうそくは停電の備えで２０本のつもりだ。細い青と緑の２本は、昼間に沼田が友達からぶんどった。そう、今日の午後、同郷で同じ専門学校に通う親友岡部のアパートで、書棚に、デコレーションケーキの箱に付いてる赤青黄緑白の５本セットを見つけたとたん、沼田は、今日が何の日かを思い出したのだった。これちょうだい、と返事も待たずにカバンに入れて靴を履いた。店に寄って、同居人より先に帰ってきたのだ。

佐々木は、これまでになくみち足りている、と感じていた。蛍光灯を消した部屋に揺れる炎。その向こうから、歌詞が…バスデイ、ディアにさしかかり、上がりきらない苦し紛れの高音。目の前にあるのは、ちょっと小銭のいるケーキではないけれど、このあまりに典型的な状況に気恥ずかしくも感じた。全身を這うこそばゆさに勇気づけられてファーストフードの上に立つろうそくを吹き消したのだった。

今、沼田は、窓際のソファで、パン粉のカリカリしたチキンウィングの最後の一本をつまみ、２本目のビールを手にしている。半分に切り分けた芋を食べる儀式も終わったので、テーブルを離れ、ゆったりできる低いソファに短パンのお尻を落とした。脚も折ってソファに乗せた。けど、腹筋が苦しくなったのか、すぐに片方の脚を延ばし、まだ丸く弾力のあるかかとを畳につけていた。

「シン、なんか話してよ」

佐々木は、思わず赤面した。沼田の所作を追い、土踏まずの反った自分の足とは違うなあと、その形状の感触を想像したところだったからだ。しかし、外面は、平素と変わらないクールな表情にみえた。

「島にいたんだろ。その時のこととかさ」

開いている窓の向こうには白味を帯びた空があり、日の名残が感じられた。

「たいした話はないぜ」

「いいから、いいから」

「そうだな、どうしてもっていうなら、」

「島へ移ったのは学校へ上がる前だった。

そのころ、憲一は勤め、あずさは染色工房で見習いをしていたから、俺たちは、日中ひとりでヒマを潰さなければいけなかった。

そうなんだ、なぜか家にいたんだよ。近くに遊び友達もいなかった。しかたなく、動物や街で見た人の真似をして自分を笑わせていた。ごっこ遊びさ。

センは読書だよ。知ってるだろ。俺より後で生まれたくせもう字が読めた。兄は眼中になかったのさ。

あずさの勘違いがきっかけだった。忘れ物を取りに戻ってきたのが運の尽き、息せき切った勢いで驚かさないようにと、呼吸を整えてソッとドアを開けたのが仇になった。

あずさはこう思った。

そういえば、シンは何を聞いても返事らしい返事はしない。口角をひっぱってニッと笑って得意になっている。一人でぶつぶつ言って踊っているかと思えば突然笑い出す。体も同じ

年ごろの子より2まわりも小さい。おつむもからだも弱いんじゃないんだろうかってさ。サイズは別として、ふつうの子供の振る舞いだと思うんだけどね。

実は、感心しないものを吸引してのコトだったとかで、そういう世代だったんだ、ひそかにビクついていた。ああ、やっぱりと、急に後悔に襲われたらしい。

今からでも、自然に浸せば、その作用を打ち消せるのではないか、おりこうになるのではないか、と本気で思ったんだとか。どういう根拠かさっぱり分からないけど。

それに、隣に誰がいるか分からない都会のアパートよりは、醤油の貸し借りのできる田舎の方が、本三昧のセンにも幼児つきあいができて、ぶっちょうづらも笑うのではないか。

憲一は憲一で、収入の為とはいえ、窮屈な会社生活が嫌になっていた。あずさも工房に未練はなかった。そろそろ独立したいと思っていたからさ。しかも3月という切りのいい時だった。

引っ越そう。ふたりは、そう結論した。

善は急げってことで、三日後には、双方仕事から身を退き、その次の日には、横浜から、島に向かったんだ。

フェリーの2等。何でって？安いし、そっちの方が面白いっていうのが理由かな。雨で幸先はよくなかったけど、海の広がりは爽快だった。狭い部屋を出ての大海原。燃料のにおいや、長い手すり、階段、広い甲板、揺れも楽しかった。

大部屋で他の客と、雑魚寝と酒盛りの2泊3日。こどもはこどもで遊んでいる。それを2回。そうなんだ。直行はなかったんだ。乗り換え。それぞれ、長い停泊と航海を何度か繰り返すんだよ。着いたときには、さすがに飽きて、陸が恋しくなっていた。

下船口で、生ぬるい、けど、悪くない匂いの空気を吸い込んだ。ナップサックを背負って一人前のつもりさ。はずんだ気持ちで、先頭を歩いていた。こどもの頃って何でも楽しいもんさ。けっこう高いところから、狭い階段で降りるのもスリルがあった。

途中「おお」という声で振り返った。荷物に埋もれた憲一が、抱かえた大風呂敷を、これでもかというくらい左右に揺らしていた。あずさも、やっぱり家財道具の入った袋を背負って、センと手をつないでいた。反対の手には、底がつきそうな特大の紙袋。その手をあげて、憲一と同じく大げさにゆすっていた。

桟橋では、タケちゃんがワイパーみたいに手を振っていた。ふたりが学生時代に集会かなんかで知り合った友達さ。

じゃがいもを作ってるって。なぜ南の島でじゃがいもなのかって？なぜなんだろうな。みんな作ってた。収穫を手伝う掟もあった。行かないと村八分、というか自分の収穫を手伝ってもらえない。だから必ず行く。傷がついたら商品価値がなくなるから気も遣う。思ってるより縛られた世界さ。

桟橋に降りる、地面が揺れていた。海原をいく船みたいに。長いこと乗ってるとそうなるんだよ。ふらつきながら、横並びにタケのあとをついていった。

彼は、大風呂敷と特大紙袋をさげて一歩先をいく。何か音が聞こえるんだ。脚の横、カーキの作業ズボンのポケットから。頭に浮かんできたのは、お猿のシンバル。赤い帽子をかぶったおもちゃ。実際は小銭だった。そういつやつさ。

持べきものは友達だって。そうそう、憲一の口癖だよ。その伝手で借りた家。賃貸物件はそれなりにあったんだよ。なぜって、島の若者は本土へ行くし、出稼ぎもある。逆に、本土からは、自然を満喫しながら自給自足を目指す若者が来る。需要と供給ってものさ。何千円か出せば、庭というか、作業場付きの一軒家を借りることができたんだ。

その日は、タケの家で飯を食った。相方と3日前に立ったばかりの赤ん坊と指しゃぶりしてる幼児、他の友達もいて総勢１０人。帰りもタケが送ってくれた。

当然、酔っ払い運転さ。元プロだから任せとけって言うけど、

道は、舗装されてないし、蛇行するし、荷台にしがみついた。それでも、みんな愉快で、あずさが星座を教えてくれた。家も街灯もないから、くっきりなのさ。風を受けて走るのも初めてだった。戻ったときには、ヘロヘロで、一組だけおいてあった布団を広げて即みんな倒れこんだよ。

隣に住んでいる大家に当日挨拶に行ったけど、翌朝から、その大家の指定する島人や、大和人の紹介する大和人をめぐる旅となり、挨拶と歓待の一週間が過ぎた。大人たちが背負ってきた家財道具の荷ほどきはずいぶん後になった気がする。

途中で、息抜きだって、一度、海にいった。そう、借家からは坂を下ってすぐだった。さすが南の島。春の海は、もうぬるかったよ。

４月に小学校へ入学した。

友達が一杯できるぞ。憲一が言ったから、楽しみにしてたけど、裏切られたよ。島人っ子は気に入らなかった、男のくせに白いってところがまず、服も気に障って、言葉も気取ってるってさ。しゃべってもないのに。

逆に、好奇心で寄ってくる子もいた。だから、全員が敵ってわけじゃなかったんだけど…、でも、いや、だからってことか、敵は家の近くにいた。年上も。俺は同い年の中ではチビだったから、いや、背が伸びたのは一〇代になってからだよ、体格は負け、数でも負け。定規で脚をたたかれたり、倒されたり、ランドセルを取られたりになった。ほんとうさ。そのころはね。…今だって…ま、いいさ。

ところが、親愛の情、というのが憲一説だった。好きな女の子をいじめるのと同じ原理なんだと。ラブ＆ピースにつかってきたケンちゃんらしい希望的観測。

確かに、そのうち、やつらも、俺もちょこっと成長した。そして馴染んだ。必要な時間がたったってことかな。今となっては、幼馴染といえるやつらさ。

だけど、いじめの理由は、好きだからじゃなくて、異質だったからだろ。まあ、よく言えば、洗礼。仲間化への儀礼さ。

あいつら、こどものことはこどもで解決しろとばかりに、保護者のくせして、いじめっ子の親たちには文句を言うこともなく、俺には、立ち向かえとも、逃げろとも言わなかった。こっちは、青あざ、擦り傷、たんこぶ、出血してんのに。

すぐに『シンちゃんの登下校時間』ってのができた。皆より１０分遅くきて１０分早く帰るって作戦だ。誰の案か分からないけど、ゆっくり歩けるようになった。地面を虫が横切ればしゃがめるし、鳥が鳴けば木を仰ぐこともできる。けど、授業と授業の間。これは変わらない。

で、入学からひと月ほどたったある日、ちびのシンちゃんは、家を出ると海へ向かった。そうだ、学校にいかなければいいんだ！って、やっと気づいたんだ。

行ったのは、潮だまり。一度来たことがあった。海の虫がちょろちょろする岩をつたって目当ての場所でしゃがんだ。

音をたてないよう、じっと息を殺す。どのくらいたったのかな、顔を上げたら、途中の岩が水没していた。浜に戻れない。

満潮に出ている岩はあったけ。いや無い。それを思い出したら、胸にひゅいと絶望の突風が吹いた。天気のいい日でさ。そよそよと風が顔に当たる。波の音が響いてさ。岩が、海の下に消えて行くんだぜ。

高い所に移ったけど、足首まで水がきた。波にすくわれそうになる。体勢を低くして岩をつかんだ。涙も出てきた。そんなとき、俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。先生たちが探しに出てきたんだ。

あずさと憲一にいやと言うほど叱られ、次の日からは、担任が送り迎えにくるようになった。自由は一日でおしまい。まあ、その一件のおかげで、四六時中、先生たちは気配りだ。それに、一年坊主は昼に下校だったから、まあ、もったんだろう。聞いてる？

…じゃ続けるよ。

人生で最初の夏休みが来た。7月の向こうも、まるまるひと月休み。山みたいなもんさ。新学期なんて見えもしない。ふさいだ気持ちは吹き飛んだ。

初日から二週間ほど、家族で北や南の島を点々と旅行したあと、大人たちは仕事にもどった。農業の見習いさ。

こどもたちだけになるからと、あずさが、ひよこをくれた。知り合いの家から分けてもらったんだ。本の虫センも見に来た。ひよこはかわいい。夢中になった。

新学期の初日、そう、やっぱり休みに終わりは来た、ガンコに、家の柱にしがみついてたら、担任も両親もあきらめて、じゃ、２学期は ひよこの観察日記をつけましょう、ってさ。

うん、たぶん、ドロップアウトとは思ってなかっただろう。自分たちだって働きバチは御免ってばかりに、島にやってきたやつらだからな。

嬉しくて，毎日、一生懸命、世話した。もう産毛がだいぶ抜けていた。餌を食べるのを見てると楽しい。水を取り替えたり、家をそうじしたり、頭のなでたりも楽しい。意外だって？そうかな。で、頭をなでるとさ、ちょっと伏目がちになってピヨピヨなくんだな。それを憲一に言ったら、憲一もうれしそうにうなづいてたよ。そのときの憲一の顔はなぜかよく覚えてる。

それで、昼はひよこ、夜は海が、俺の日課となった。そういうこと。あの事件も、好奇心一杯のシンちゃんを止める力はなかったってことだ。

夜の魚達はどうしてるのだろうか。眠っているのだろうか。それとも活動しているのか。毎日、懐中電灯を手にして干潟に行った。

その夜は、ちょうど月夜で、晴れ渡った空は星だらけだった。今思うに、大層ロマッチックな晩だったんだ。こどもは、夜９時には寝床に入ることとなっていた。あいつらが規則作ってるのも、ちゃんちゃらおかしいんだけど。センは言いつけを守ってた。妹が眠ったら部屋を抜け出す。

岩場に着くと、そっと懐中電灯を水に向ける。影がよぎる。しばらくすると魚たちはじっとする。しばらく眺めて家に戻る。

立ち上がろうとした時、砂浜の方から声が聞こえた。観光客もいない季節だったから何だろうと行ってみた。

憲一とあずさ、だったんだな。これが。波うち際でキャーキャー騒いでいた。それも素っ裸で。二十代後半のいい大人がさ。水掛け合ってた。浜には，ピクニックシートと脱いだ服が見えた。島の連中に顰蹙かうのも分かるさ。だから、責任のいったんはやつらにあったと思うね。

俺の耳に、ガミガミとした小言が既に聞こえ出していた。いいつけを破ったことを知られちゃまずいと、岩影に身をひそめた。

あいつら海からあがってピクニックシートに寝そべったんだけど、子供ながらに何かドキドキしてきた。しばらく、くすぐりっこしてたんだけど，そのうち憲一があずさに覆いかぶさって、動物じみた声だしはじめたんだ。声が急に大きくなったから思ったら，静かになった。

しばらく動けなかった。でも、そのままじっとしていてもしかたがないし、帰ろう、と思って立ち上がった。

腹と脚の間にはさんでいた懐中電灯がおっこちた。岩にあたってカランカランって。あいつらピクッてして、だれ？って。

しかたなく岩かげから出た。シン！と言って、あいつらは顔を見合わせた。あずさが、おいでって手招きするんで近寄った。ずっとあそこにいたの？って聞くから、うなづいたら、また顔を見合わせていたよ。困ってるのが分かったからさ、大好きといって抱きついてやった。出来た子だろ？

憲一は笑って俺の頭を撫でた。俺は、得意の笑い顔で返してしてやった。彼らは服をきて、俺達は手をつないで仲良く家路

についた、と言うわけだ。
いないから探しにきたと、思ったらしい。お蔭で、魚観察の件は、どさくさにまぎれた。けど、夜、海にいくのは、よしたよ。邪魔しちゃ悪いからな. 魚も人も。聞いてる?

佐々木が近づいてみると、沼田は静かな寝息を立てていた。軽く肩をゆすったが目を開ける気配はない。曲げた肘と脇腹でバランスを取っているのか、手に持ったビールが落ちたり、傾いたり、していないのが不思議だ。指を解いて缶を取り出した。底の方には、まだいくらか残っていた。
部屋で寝たら?と言うと、返事の代わりか、そのまま横に倒れてしまった。しょうがないなあ。タオルケットを持ってきてかけてやり、窓は開けたままに、佐々木は、灯りのヒモを引いた。

諸々

丘乃恵

1．報道から

力による現状変更について、連日ニュースとなっている。欧米諸国の強い非難も合わせて報道されている。解決はしていない。少し思ったことを書こうと思うが、身近なメディアの報道や情報だけを見たこと、そして、本筋から外れた話題も多いとお断りしておく。

・同族、やりたいもの、回避

市民へ攻撃という戦争犯罪が行われているという。対し、欧米からの強い非難がある。これに関して、ネット記事に「アジア差別」という言葉をみかけた。まず、これを取り上げよう。「シリアでは、欧米はこのような強い反応を示さなかった。アジアに対する差別ではないか」これが記事の趣旨だ。

確かに報道の仕方は異なると感じる。しかし、差別という言葉でくくることに、なにか違和感を感じた。情動の仕組みと思えたからだ。身内がひどい目に合えば我が身のことと感じるが、遠い親戚なら我が事とは感じにくい。欧米から見ればシリアは中東。西アジアだ。東欧という同じ欧に属する今回の国とは距離感が違うのではないか。極東アジア人からみると、顔も歴史も重なって見えるが、別グループだろう、と思ったのだ。

記事の本当の趣旨は、「欧米よ、正義を説くなら、被害者に対し、平等な対応をせよ」だったのかもしれない。

自分たちのグループをだけを「人間」と呼んだ例は、たくさんある。「人間」でないなら、躊躇せず非道を行う輩もある。歴史上、考えたくない残虐な振る舞いが行われた。

今日、世界の天気予報がテレビで知らされ、海外の出来事が日常の話題になる。もはや、地球上に、公式には、非人間で括られるグループはないと思われる。

しかし、好き嫌いや、価値感の不一致はある。個人と同じことだ。それが高じて、暴力沙汰や潰しあいも起きる。

もし、本気でやりたい者がいたら、その阻止は難しい。しかも、いったん権力を得てしまえば、各方面を動かせる、そして、自己の権力を維持できるシステムに現状を作り変えることもできてしまう。これは繰り返されてきたことだろう。

やりたいことを躊躇なくやる者。進展や発展に寄与するかもしれないが、真逆もある。人間世界が、たとえ、人体のごとくのひとつの平和な有機体的世界にまとまったとしても、出現するだろう。致命的な活動が起こる可能性はある。人体にもあるような監視や取締まりのシステムが必要になるのだろう。そのような動きの萌芽は既にあるけれど、まだまだ、恒常的で、誰もが納得するシステムとしては機能していない。ただ、人体においても全細胞が納得しているかどうかは不明だが・・。

いま、世界は人体ほどのツナガリはない。では、現状において、国を超える組織なら、止められるのか。例えば国連。侵攻された側の大統領は、安保理改革を要求した。

もし、常任理事国の拒否権をなくし、仮に多数決となったらどうだろう。進歩かもしれないが、やりたいものが現れた場合、素直に決定に従うだろうか。領土がある限り、究極的には自給自足の余地がある。やりたいが勝てば脱会するかもしれない。

国連軍を強化すればいいだろうか。現在の国連軍は課題や制限を抱えているそうだ。そして活動は平和維持。武力という点では、核を持ち、地上の１、２位を争うような軍事大国には及ばない。

仮に国連に地上最強の特設軍があればどうだろう。どの国も歯向かおうとは思えない程の兵士や兵器である。というこ

とは、先端を行く科学技術と守秘が徹底される特殊環境になる。意欲や正義に燃えている間はいいが、時間の経過とともに腐敗も起こりうる。かえって、やりたいもの温床にならないとも限らない。軍事クーデターでも起きれば地球丸ごと支配されてしまう。結局、意味がない。

今の時代、国連の名であれ、同盟参加であれ、他の軍事大国が、武力対決すれば世界大戦の危険がある。特に、核や他の大量破壊兵器のことを考えると、戦い方は難しい。

当事者間の問題として、第三者は、調停者となるか、外野か裏で応援するしかない、というのが現在のようだ。平和維持活動、経済制裁、情報や補給の提供、対象国への禁輸、難民対応などである。

これは、歴史から学んだ、過去より適切な方法なのだろうか。分からない。ただ解決までの時間は長そうに思える。その間戦いは続き、犠牲は続き、取られたものは、戻らないかもしれない。

強制的に止める方法をＳＦ的に考えてみる。国連での多数決により、該当国を、核も通さない鉄壁の物質で覆って封じ込めるとか、友好的な心になる雨雲を上空に発生させるとか。しかし、これらは、感心した方法ではない。相手を封じ込めるという考え方でしかないからだ。

三体シリーズの言葉を借りるなら、いまは、地球内が「暗黒森林」ということになるだろう。資源の量は決まっている。猜疑を糧に相手に勝つ技を開発する。破滅兵器と認識はしても、核は放棄できない。生き残るために。究極は生き残るのはただ一人かもしれない。「ぼくらの」の世界だ。実際にそんな生態の昆虫もいる。

この先、もし、地球上に、民主が進むと、力が民の方にさらにシフトし、局所権力の重みが下がることで、社会に、バランスのとれた関係性が作られていくのだろうか。

もし、過去の誰かのやりたいが今の土台であるなら、その上での平和をとなえても、不満をもつものは残るだろう。不満を無視し続けた場合、怒りの爆発につながるのは、個人と同じだろう。どの不満も無視せずに、よく聞き、よく話し合うことで爆発を予防できるのだろうか。

同時に、基本的な財の分配や共有が進む必要もありそうに思える。財閥や巨大企業という権力構造が経済分野のやりたい者になる恐れがあるからだ。また、資源以上の人口がいても奪い合いが起きる。理念や自覚を教える教育も必要となり、こうなると、さらにさらに管理社会とならざるを得ない。自由主義者は反対するかもしれない。自由だからこそ、一旗あげたいとやる気がでるのだろうし、自由だからこそ、今、武力を使って、やりたいことができるとも言える。どう折り合うのだろう。

学びは、世代交代すれば、なくなる。なくなるとまではいかなくても、体験が伴わない限り薄くなるだろう。傑物には寿命がある。しかし、ゆっくりだとしても、万年、千年、百年単位では、冴えた方法に近づいていると思いたい。

近年話題のＡＩは、知恵を貸してくれるだろうか。人間のような世代交代はない。経験や知識は蓄積されるばかりだ。アルゴリズムは進化し続けるだろう。個々に違う利害、安全や経済や情動を、グループや国によって異なる持ち札を考慮して、どの国もどの人も等しく立つようするアイディアが出るだろうか。

・共同参画、不適切な話題

この度の侵攻を報道するテレビニュースでは、子供と避難する女性、戦いに残る男性という映像が多い。戦う女性も映る

が、難民は女・子供、そして年寄りが圧倒的多数である。（実際の男女比率など調べていない）

戦いにおける男女共同参画（注）という言葉が浮かんだ。

ちなみに、U国は２１年のジェンダーギャップランキングでは７４位であり、最下位に近いこの国より格差がないと評価されている。

共同参画と聞いて機械的に思いつく軍隊は、戦士は男女半々。例えば、ジェンダー問わずの皆兵で、避難者（子供と高齢者）につきそう者は、抽選で決めるような制度。各国の人々はどのように考え、どのようにしているのだろう。

ウィキペディアによれば、男女共の徴兵制のある国は世界に数か国。ただし、男女で条件や期間は違うようである。ざっくり世界２００の国の中で、ほぼ全部が軍隊を持ち、数十か国が徴兵制、あとは志願制という中での話である。

確かに体力に統計的な男女差はあり、オリンピックも男女別競技になっている。しかし、男性が戦い築いた平和を土台としての共同参画とは、どういうことになるのだろうか。およそ今がそうであるのだけど。

過去は、腕力や体力は、今よりずっと重要な要素だった。労働に置いても、土木、建築、荷役など。筋力や体力を使う場面は多い。ブルドーザーやエンジンといった機械動力が出て、非力な者にも参加の機会が生まれた。

農業は、比較的共同参画できた分野という。馬や牛が重労働を担ってくれてもいた。それで男尊女卑の考えや振舞いが、比較的少なかったと聞く。

テクノロジーが発達したとはいえ、武器はまだスマホほど軽くないだろう。部屋でジョイスティックを握りドローン兵器を飛ばす戦いになれば女性も進出するかもしれない。

だから、男性が戦い、女子供が避難することは、適正を考慮した現時点での共同参画と言えるのかもしれない。

それとも共同参画という考えも実態も、そこまで浸透していないが為、伝統的な対応が続いていると言った方が、実情を表しているのだろうか。

もともと、共同参画は、意識改革とか、機会均等、能力の発揮とされるので、なんでも半々ということではない。それは覚えておかないといけないだろう。

共同参画という掛け声があることは、まだ途上ということだが、テクノロジーは、その共同参画を後押ししていくだろう。

視点を変える。兵隊が男性である理由について、別の言い方もできる。例えば、子孫を絶やさないため、と生物学者は説明するかもしれない。男性１人女性１０人が残るのと、女性１人男性１０人残るのと、どちらが子孫繁栄に有利か考えれば分かる。加えて、雌獲得のライバルを戦場に送る哺乳類の行動という説明も考えられる。いや、後に残った男性に託すという同族の協力行動か。だから、妥当な選択である。と言えるかもしれない。

さて、実際に行われている戦争を話題にするときに、こんな考え方を持ち出すことは、不謹慎や非常識に当たる、と思われる。

生物学などの学問分野では、研究対象を客観視する、つまり、同族の集合の外に出る。同族の心情を排することだ。そして同族の尊厳を傷つける結論もある。

お前だって人間だろ、何様のつもりだ！とか、実際に犠牲者の出ている状況でよくそんなことを言えるな、ということだ。

しかし、ある問題を議論するときに、不適切なもの言いが存在することについては、それ自体、一考に値するのではないか。

ある分野ではこう言うが、ここでは不適切だから言わないとか。もしくは、ある一面からの見方かもしれないが、誰かの気に障ってしまうから仕舞っておくとか。それで何か損失す

ることはないだろうか。
これがＡＩならどうだろう。そのような、タブーも超えて議論（演算）するだろうし、人も、ＡＩにならそういった議論を許すと思われる。私が言ってるんじゃなくて、ＡＩが言ってるんです、と言えるからだ。そういう意味でもＡＩが、あらゆる情報を元に、多次元で成立する、目からうろこの考えを披露してくれることを期待したい。

余談だが、皆兵制度には「市民」はいないと思う。だから、全員が攻撃対象者だ。先の太平洋戦争では、東京など都市空襲を受けた。多くの市民が犠牲になったが、それを正当化する理屈は「日本の政策で誰もが軍需に関わっていた。だからみな兵隊だった」とか。何かのドキュメンタリーで言っていた。

注：　男女共同参画　「男女共同参画社会」って何だろう？ ― 内閣府男女共同参画局（gender.go.jp）

2．精子競争から

科学番組で受精の映像を見た。一つの卵子（猿か人だと思うが）をめがけて数億の精子が、突進する。最初の一匹（失礼な数え方かも）が卵子に入れば、残りは死滅する。
これは大変過酷な競争だな、とため息をついたが、同時に思った。これって何の意味があるの？そもそも精子の遠泳能力と遺伝子の良し悪し（目的とする卵子との相性か）って関係あるわけ？

まず、最初の疑問。ライバルとの競争（いわゆる雄同志の雌をめぐる戦い）に勝ったのに、また、配偶子レベルで競争するのは、何故か？無駄ではないのか？
数億の精子が運ぶ遺伝子はそれぞれ違うという。減数分裂のときに、２３対の染色体を、どう分けたかで、構成が変わる。
個体としての勝因を、どっちのどの遺伝子のおかげと、特定・選定できないからなのだろうか。それで、組み合わせをいろいろ作って、実際に走らせて選ぶ方法にしたのだろうか。
それに、卵子も卵子毎に遺伝子の配列が違うから、それに合った相手を配偶子レベルで決める必要があるのかもしれない。
と、考えておき、次に行く。

さて、映像から、卵子到達競争で試される能力は、以下に見えた。
・鞭毛の推進力
・泳ぎ切る体力
・毒物への耐性
・迷路を正しく選択する知能
・運の強さ（いや相性か。好みの精子なら卵子は助けるかもしれないではないか）

ところで、筆者には、遺伝子は積荷、精子は船にみえる。船の性能は、積荷の質と基本的に関係ない。つまり、船が競争しても意味がない。ではなぜ競うのか。

そこで、また考えてみた。
船を作るのは誰か？元となる設計図は何か？
４つのパターンを考えた。
① 造船：人体　設計図：体細胞の特定の遺伝子
② 造船：人体　設計図：精子内の遺伝子
③ 造船：精子　設計図：体細胞の特定の遺伝子
④ 造船：精子　設計図：精子内の遺伝子

船が競争することで意味が出るのは、②か④だ。つまり、積み荷が船自身の設計図という場合に、意味が出る。

精子が、遺伝子以外のなにか重要な「物」を、船の性能と関係し受精後も作用する「物」を運んでいる可能性は、ここでは考えないことにする。

造船者に人体を入れたのは、精子は人体が作るイメージがあったからだ。

そのイメージから、積荷は違っても、船はみな同じ規格で、運動能力の差は、製造誤差。あるいは、体細胞側が好きに選んだ設計図で作った船、とこれまで何となく考えていた。だから、競争の意味が分からなかった、ということだ。

実際はどうなのか知らないが、考えてみれば、④なのかと思う。それぞれの手り船で卵島を目指す競争ということ。

もし、そうなら、これは、一匹一匹、船というより、遺伝子の現れ、意思を持った生命ではないか！実際、映像もそう見えるし。

卵島の宝（遺伝子）もそれぞれ違う。宝が島の形成に関わるなら、同じように島自体にも個性があるはずだ。

もっとオオザッパに言って、卵子が異なれば、競争に勝つ精子は違うのだろうか。それとも、最強の配偶子はどんな海でも一番にわたっていくのだろうか。また、島が嫌えば、一番乗りの勇者であっても拒否され、二番手三番手が選ばれたりするのだろうか。

配偶子ってそれ自体が、生命っぽい。

では、それ以外はどうなのか。

心臓や皮膚など人体のあらゆる組織は、体を構成する部品というイメージが強い。少なくとも筆者にとって。

が、実は、体力・知力・運をもつ個々の生命の集まり。部品ではなく職能集団（同じ顔だけど）ではないのか。

そして人体とは、いろいろな職能をもった個々の集う巨大な都市。いや、国家だ、帝国だ、地球だ、ひとつの宇宙だ。

そういう妄想・空想を広げていくと、では、この「わたし」という意識は、何なのだ。死ぬとはどういうことになるのか、と思うである。

3．宇宙で農業

月も火星も、地面の組成は地球と似たようなもの。なぜってひとつの太陽系。超新星爆発の塵が降り積もった岩石惑星帯。特に、月は地球からちぎれたというから、似ているというより、同じと言った方がいいかもしれません。でも、同じでも、発芽しないのです。水や大気や微生物がないと。

土の種というのがあるそうです。微生物を入れた土ボール、これを不毛な土壌に埋めると、少しずつ穣な土になっていくといいます。これは水も大気もある地球での話ですが、そのうち他の惑星向けの土の種もできるかもしれません。

もし、月が稲や麦、森林に覆われたら、何色になるのでしょうか。

4．魚の意識

ディスカスという魚は、雌雄のペアで暮らすそうです。ある実験によれば、自分だけ餌をもらえるスイッチと、妻ももらえるスイッチがあれば、妻も得する方を押すそうです。

また、目の前にいるのが、見知らぬ雌だった場合、妻が横で見ていると、自分だけ餌がもらえるスイッチを押す。けれど、その目がなければ、彼女も得するスイッチを押すのだそうです。

何と人間臭いこと！ちゃんと顔も見分けてるんですよ。

鏡に映った自分の姿を、自分と認識できる魚もいるそうです。これができる動物は少ないそうなので、かなり賢い魚です。魚には、自己意識があるよ、と思っていたところ、そんな説も紹介されていました。

脳のある生物についてなのですが、痛みはこころの起源かもしれないそうです。ショウジョウバエやねずみの実験から分かったそう。痛みとは、何か起こってるぞ！注意しろ！という警告システムとのこと。また、体の痛みと心の痛みは、脳の同じところが反応するそうで、それらの実験からショウジョウバエだって、雌に拒否されると、失恋の痛みを感じるのだそうです。

昔のことですが、一時、短い期間、趣味で、魚釣りをしたことがあります。（ほとんど釣果なし）

珍しく釣れたとき、針を外した魚をバケツの水を張ったバケツに入れたのですが、魚は、脱糞しながら激しくあばれてあちこちぶつけていました。恐怖なんだ、魚も感情がある、と感じた瞬間です。それはどこかで読んだ、ト殺されると分かって小屋の中を逃げまわる豚の反応とも同じでした。

「自分たちのグループだけが人間」という感覚は、変わっていないのかもしれませんね。でも、科学が認識を広げる助けをしてくれています。動、いや植物までにも、やがて拡張れていくのでしょう。

ところで、前に書いたかもしれないですが、雄の尾びれを追いかける雄のグッピーを見たことがあります。オスは、メスのシッポを追っかけることになっているのですが、なぜかその子は、水色と黄色の雄をつけまわしていました。ちなみにグッピーの雌は地味ですが、雄はシッポがゴージャスで優雅なのです。

メス猫にマウントするメス犬も目撃しました。いつもしてやられている雌犬が、猫に交尾行動をした奇妙な光景でした。

よっぽど悔しかったんでしょうか。だって、あとから来た猫にからかわれてましたもん。運動神経は猫がダントツ上。追っかけっこしても、いざとなれば、ポンポンと棚に上がって、高所から見下ろしました。そして、テレビの上で、シッポを垂らして、犬釣りよろしく、挑発的に揺らしてました。

先輩犬として、その家での序列を思い知らせてやりたいと思ったのでしょう。「マウントをとる」のマウントだったのでしょう。結局、効き目はありませんでしたが。人間をチラミしながら、エへって感じでやっていたので、猫になめられたようです。

犬も猫も、情動がないとはとても思えないですね。犬も笑い顔をしますが、猫もにんまり顔をしますし。擬人化して描写しているつもりはないのです。生物共通の情動システムがあって、それが感じさせるのではないでしょうか。

そして、動物の世界でも、雌雄間生殖での特徴的な振る舞いが、その目的だけに使われる、そういうわけではない、と思いました。（ボノボは有名ですね）でも、エ、と思ったのは、交尾行動と同じ体勢や運動が、優位性の主張に使われること。いったいどういうことなのでしょう。深堀してみたいです。

さらにそして、自然に反するとか、動物はやらないとか、人間だけ、いう言い方は、実は、よく観察しないで言っている方が多いのではないか、と思うようになった次第です。

今回はこのへんで終わりたいと思います。

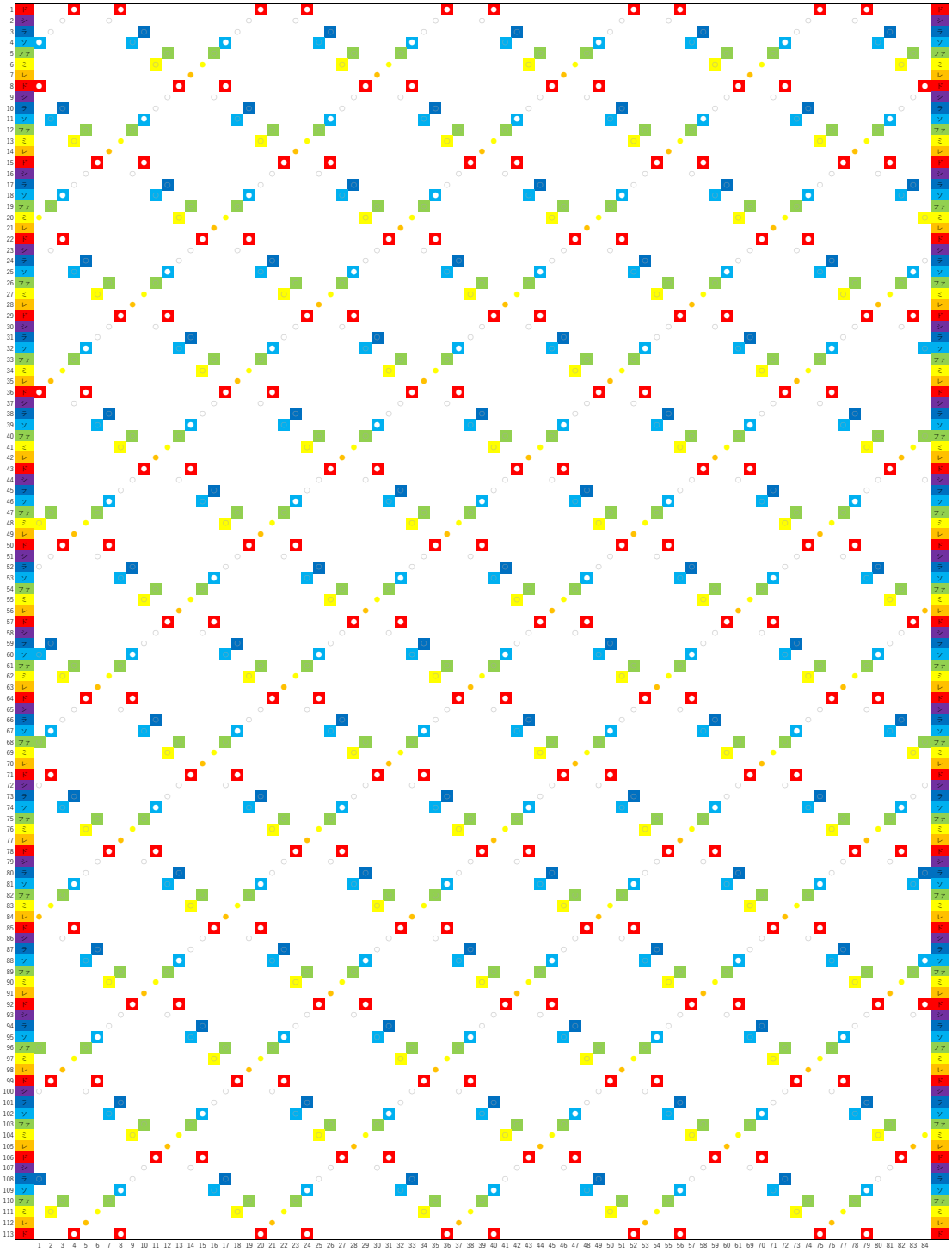


図５　パッヘルベルのカノンの通奏低音と未知との遭遇

未来世界仕様書は文芸雑誌です
お気づきの点がありましたら下記までお知らせください

未来世界仕様書　Vol.24 ver.1.0
発行:丘乃恵
2022年5月29日
Mail: mgz_miraisekai_shiyosho_100523@yahoo.co.jp
Twitter:@OkaNoMegumi